

大關 徳 道

○龍南二四六號をおくる。三年生の諸君とはこれでお別れである。一抹の淋しさがなくてもないが、新しい想念のもとに龍南は復活しなければならぬ。新しいヒューマニテイ建設の爲に龍南は立上らねばならない。混沌の世界の中で我々はこの龍南に依つて思念を淨めよう。その爲にこそ龍南はつゝましいながらも、我々の秘めた小匠となり得ようではないか。

○原稿は豫想以上に集つた。詩歌は上田教授に嚴選をお願いした。殆ど過半数が選に洩れた事は残念であつた。殊に短歌に於ては勉強しなければならぬと思つた。

翻譯は李君のがあり氣持のいゝ作品であつた。創作について云へば高橋君の作が異色ある一篇であつたし、一年生諸君の二篇があつた事は大いに意を強ふした。堀君の「戀」は部長の意見によつて、林君の「姉妹」は紙面の

都合によつて共に掲載できなかつたが、捲土重來を望んで止みません。「さんびか」(村上喜一郎)も紙面の都合で割愛しなければならなかつた事は作者に對して眞にお氣毒であつた。然しながら低調な創作陣にかゝる人々の熱ある登場を見た事は、龍南の前途に光明を見出したとも云ふべきであらう。我々は更に、次に來るものを期待する。

他に東光會の瀨上君に回想をお願いしたが、これも不掲載の止むなきに至つた。何分豫算の關係で思ふに任しなかつた。然しながら同君の如き熱ある人が去つても東光會がその使命に生きん事を龍南の爲に願ふものである。

○雜誌部は辯論部と共に九大の今中教授の招待講演を行ひ日本文化を研討する座談會に於て竹内並に門前兩教授と親しく論争する機會を得た。今年度も座談會は益々助長してゆく積りだから、諸兄の熱ある抱負に依つてお互に啓發しあひ、龍南復興の爲に一臂の力を致さんと思つてゐる。

○いつもながら非常なお世話をおかけした八波、上田兩先生に深く感謝します。